

傘を強く弾く雨。

暗い夜道、私は家路を急いでいた。

ただ、その途中。

家まであと少しというところで、見慣れない光景に視線が止まった。

すでに閉店したお店の屋根の下、二人の女の子が立っている。

「地雷系」ってやつだろうか。

ハーフツインの髪は、それぞれピンクと黒、紫と黒のツートンカラーになっていてとても目立つ。

服装も髪の色と統一されていて、双子コーデをしているようだった。

フリルのついた大きな襟に、ボリュームのある袖。短いスカートからは細い足がすらりと伸び、スニーカーはかなり厚底だ。

一瞬、「かわいいな」と思っただけだった。

でも私は変な雰囲気を感じ取ってしまった。

なんだか二人が儚くて、寂しそうで。

こんな時間に傘もなく外にいるなんて、何かあったのかもしれないと。

そんなの思い込みかも、と思ったけれど。

私は方向を変え、彼女たちに近づいた。

近づいて分かったのだけれど、二人はかなり背が高い。

それも手足が長く、細くて、まるでモデルのようだ。

しかも顔がとんでもなく似ている。実際に双子なのかもしれない。

知らない大人が自分たちへ近づいてきたことに気付いたんだろう、彼女たちは目を見開いた。

私はできるだけ優しい声を出す。

「あの……、こんな時間にどうしたの？ 何かあった？」

目を合わせる彼女たち。

ぱちぱちと何度も長い睫毛が上下し、なかなか言葉を発さない。

「大丈夫ならいいんだよ、でもこんな時間に女の子が外

にいたら心配になっちゃって」

「……あ、いや、大丈夫ですので」

ピンク髪の子が口を開いた。

作ったような高い声。彼女たちによく似合っていると思った。

そして私は、その濁すような言葉に余計なおせっかい心を刺激されてしまった。

きっとこの子達は何かワケありなんだ、寝るところがないんだ。

おせっかいな考えは、労働で荒んだ心のせいで飛躍していく。

「もしかして帰るところないの？ 一晩で良かったらうち来る？」

何を言ってるんだろう。自分でそう思ってももう口に出してしまっていた。

案の定、二人はまた目を合わせ、今度は口に手を当てていた。

「え、おもしろそう」

「お姉さんみたいな人、初めて」

二人は笑っていた。

私は二人を連れて帰ることになった。

家まであと少し。

その間に私は二人が軽い調子で話す身の上話を聞いた。

ピンク髪が「奈央」、紫髪が「優里」という名の双子であること。

家庭環境が悪く、家にはもうずっと帰っていないこと。

日雇いのバイトをしてカプセルホテルやネットカフェを転々としていること。

他の人間は信用ができず、ずっと二人でいること。

二人は笑いながらお決まりの流れがあるかのように話してくれた。これまでも他人に話す機会は何度もあったんだろう。

「まあ、家のことなんてどーでもいいんだ。私は奈央がいればいい」

「うん、私も優里がいればいい。寂しくても二人でいれ

ばなんとかなるもん」

私はただの会社員だ。

二人の気持ちを完全に分かってあげることはきっとできない。

それでも、今夜一晩だけでも話し相手になってあげられたらいいなと思っていた。

後から思えば、そんな考えはとんでもなく甘かったんだけど。

二人をリビングに案内してドアを閉めた途端。

二人は私に抱きついてきた。

「お姉さん、マジでうちのこ家に入れちゃったじゃん」

奈央ちゃんが私の腕を取る。

「もっと他人を警戒したほうがいいよー？ うちらが悪い人だったらどうするの？」

優里ちゃんも反対側から私の腕に腕を絡めてきた。

「それは……困るけど」

「じゃあなんで連れてきたの？」

奈央ちゃんが首を傾げた。厚底スニーカーを脱いでも、私よりずっと背が高い。

「だって、二人とも帰るところないんでしょう？」

そこで二人はまた目を見合わせた。

そして顔には笑顔が広がった。

「やっぱ変な人！」

「うん、普通じゃないね」

二人はさらに体を密着させてきた。

私の体は埋もれてしまう。

「私、お姉さんのこと好きかも」

「私も」

こんな可愛い子たちに好かれて嫌な気はしない。

「それはありがとう。とりあえずシャワー浴びて、何か食べる？ 簡単なものでよければ作るよ」

そう言って、私は二人の腕から抜けようとした。

でもそれを止めるように、今度は肩と腰をしっかりと抱かれてしまった。

「ねえ、お姉さん」

「お姉さんに甘えていい？」

「……？ え？」

そこで私は気付いた。

二人の腰に、何か硬いものが、「在」る。

「あれ？ マジで気付いてなかったんだ？」

「だから家あげちゃったんだ」

ずりずり、私の体に擦り付けるように腰を動かす二人。
その塊は体積を増していく。

「うそ…、男の子だったの？」

「嘘はついてないけどね♡」

「お姉さんが勝手に判断したんでしょ♡」

それは確かにそう。

私がまた二人の腕から逃げようと体を動かすと、今度は腕を引っ張られ、リビングのソファまで引きずられた。

「ね♡ せっかくだから気持ちいいことしよー？♡」

「泊めてくれたお礼になんでもしてあげる♡♡」

肩を押さえ込まれソファに座らされた。

二人もなし崩しに倒れ込んできて、私はまた二人の腕の中だ。

「子どものくせに何言ってんの、そんなことするわけないでしょ」

「いやいや、年齢的には成人してるし。ほら見てよ♡」
優里ちゃんが紫色のスカートを見せつけるように捲った。

「ちゃんとオトナちゃんぽでしょ♡♡♡」

「……！！」

慌てて目を逸らしたけど、見えてしまった。

女性ものの下着から溢れるように勃起したものを。

赤く膨らんだ亀頭、張ったカリ、血管の浮いた竿。フリルの奥でメキメキと勃起しているおちんぽ。

見た目の可愛らしさとのギャップに頭がクラクラしてくる。

「とにかくそんなことしなくていいから…。ただ一晩ちゃんとしたところで寝かせてあげようと思っただけで」

「じゃあちゅーだけ♡ ちゅーだけならいいでしょ？」

今度は奈央ちゃんが私をソファの背もたれに押し付けた。

そして横から覆い被さるように顔を近づけてくる。

もう避けきれない。奈央ちゃんは長い爪が当たらないように指をピンと伸ばして、私の頬に手を添えた。

ちゅ♡♡

唇に唇が当たって、可愛い音が弾ける。

私は顎を引き離れようとしたけれど、奈央ちゃんは私を離さなかった。

ちゅ♡ ちゅ♡

何度も当ててくる唇。

ちゅう♡

「ちょ、」

手で遮ろうとすればその手は横から優里ちゃんに絡め取られ。

ちゅ♡ ちゅ♡ ちゅ♡ ……ちゅる♡

「……うあ」

それどころか、開いた唇から奈央ちゃんの舌が入ってきてしまった。

同時に頭の後ろを手でホールドされる。背の高さから想像できる、手も大きい。

ちゅる♡ れる♡ れろん♡♡

「っ、」

優里ちゃんが「…おねーさん舌の逃し方わかんないんだ♡ かわいーね♡♡」と揶揄うように笑って、手を胸まで移動させてきた。

湿ったシャツごと、胸の柔らかさを確かめるように包んで、動く。

奈央ちゃんの手も反対の胸を包み、でも私の意識をキスへ戻すように口内で舌を細かく動かしてきた。

ちゅ♡ ぷ、ちゅ♡ れろ♡♡

「、っ、ん…、う、う」

私の唇を唇で食みながら、舌を舌を擦り付けてきて、口を閉じられないのが分かったと、

ぢゅ、ぷう……♡♡♡

「んっ、」

次に唇を深く重ねてくる。

粘膜同士が密着し、空気の通り道がなくなる。舌も逃げられなくなる。

捕まった舌が誘い出され、甘えるように吸われた。

ぢゅろ……♡♡ ぢゅろお♡♡ ぢゅぷ、ぢゅぷ♡♡

♡

「……あ、は」

目を開くとすぐそこに奈央ちゃんの長い睫毛。

それが角度を変え、ほんの少しだけ離れては近づいて、その動きと同じように舌が絡みついてくる。

見ていた優里ちゃんが楽しそうに笑った。

「お姉さん、舌弱いの？♡ とろんってしてきたね♡♡♡
♡」

……自分でも分かってる。

奈央ちゃんの柔らかい唇と、意図して尖らせたり、逆に力を抜いたりする舌。

それが私の舌に触れてお互いに形を変えていくのが…、気持ちよくなってしまった……♡♡♡♡

「ねえ、私にも変わってよお♡」

今度は優里ちゃんの手が頬を包んだ♡

促されるまま右を向くと♡

ぷちゅ♡♡ ちゅう…っ♡♡♡

優里ちゃんはすぐに下唇に吸い付いてきた♡

奈央ちゃんの慣らすようなキスとは違う、始めから快感を与えるような感触♡♡

「……ん♡ っ、」

ちゅ♡ ちゅぶ♡♡じゅる♡

優里ちゃんの誘うままに唇を開くと、柔らかい舌が入ってきて♡

ずり♡ずり♡

擦り合わされたあと、

じゅる…っ♡♡

奥まで進んできて、思わず顎が上がる♡♡

追いかけてくる舌♡ 私を見下ろしもっと奥まで舌を下ろしてきた♡♡

「…ッ♡ あ、あ♡♡」

「キス気持ちいいね～？♡♡」

「ねえお姉さん♡ こっちにもちゅーしていい？♡♡」

左側から奈央ちゃんの手が私のシャツのボタンを上から順に外していく♡

とろとろに絡まる舌に夢中の私は、ただされるがままだ♡♡

ボタンを外し終え、シャツを開いた奈央ちゃんはブラジャーのホックまで外すと私の上半身に抱きついてきた♡♡

さらさらの髪が素肌に当たり、奈央ちゃんの香水のいい匂いが鼻をくすぐる♡

奈央ちゃんは鼻先をブラジャーの丸みにすりすりとし付け、シャツと一緒にブラジャーのストラップを肩から下ろしてしまった♡♡

乳首を風が撫でて、素肌を晒していることを思い知らされる♡

「可愛い乳首…♡ いっぱいちゅっちゅしようね♡♡」

乳輪から少し外れたところに押し付けられた唇♡♡

それが少しずつ中心へ近づいてきてくすぐったい♡

優里ちゃんに舌を伸ばしながら少しだけ体を震わせてしまう♡♡

すり♡ すり…♡

撫でるように移動した唇が、

ちゅ♡♡

乳首に触れた瞬間♡♡

「…ッ♡♡♡」

びくっと私は肩をすくめた♡♡

反射で引っ込めてしまった舌は優里ちゃんに追いか
けられ捕まって♡

奈央ちゃんは腕を私の腰に巻きつけたまま、乳首から
唇を離さない♡♡♡

じゅる♡♡ じゅ、じゅぷ♡♡ れろお♡れる、れる、
れる♡♡♡

優里ちゃんに丁寧に擦り合わされ吸われる舌♡♡

ちゅ♡ ちゅむ♡ちゅむ♡ ちゅ♡♡ ちゅぽ♡ちゅ
ぷ♡

奈央ちゃんに優しく唇タップされる乳首♡♡

「……、あ♡♡ あっ♡♡ …ん♡っ♡」

ほんのちょっとの刺激なのに♡

体がぞわぞわと鳥肌を立て、じっとしてられない♡

♡♡

「舌もっと出して♡♡ そんなト口顔されたらもっとしたくなっちゃう♡♡」

「乳首♡根っこから勃ってきたよお♡♡ 反応してくれてかわいい～♡♡♡」

「んあ♡♡あ…っ♡ は♡♡あ♡ あ、あ♡♡」

ほとんど覆い被さるように私の唇と乳首にキスを繰り返す二人♡♡

大きくて可愛い二人が懸命にそうしていると、なんだか変な気持ちになる♡♡♡

じゅ…ぽ♡♡ じゅぽ♡♡ じゅぽ♡♡

「あ♡ あ、ッは♡♡」

優里ちゃんの唇が私の舌を挟んだまま短いストロークでしごき始め♡♡

れ♡ れろ♡♡ れろれろ♡♡ れろれろれろ♡♡

「うん♡♡ ……っふ♡」

奈央ちゃんの舌が、勃った乳首に巻きつく♡♡

じゅぽ♡♡ じゅぽ♡♡ じゅぽ♡♡ じゅっ、じゅっ♡♡

れろれろれろ♡♡ ちろ、ちろ♡♡ れるる、れるる♡♡

「ッ♡♡♡ あ、だめ、こんな…♡ あッ、あ、あ♡あ♡」

「……気持ちよさそうだし、こっちもしたいな～♡♡
いいよね♡」

ようやく私の舌を解放した優里ちゃん♡
私の足元にしゃがむと私のズボンをずり下ろした♡
ラグに膝をつく優里ちゃんのフリルが素足に当たる♡
♡♡

優里ちゃんは足の間に体を差し込むと、私の下着に顔を埋めた♡ さすがに恥ずかしくて体が背もたれから飛び上がって、反射的に優里ちゃんを止めていた♡♡

「…ちょっと待った、さすがに、」
「お姉さんは気持ちよくなってればいいんだって♡♡
♡」

手を振り払われ、優里ちゃんは口を「あーん♡♡」と大きく開けると、

はぶ♡♡♡

私の下着を覆った♡♡

生暖かい息がかかり、じんわりと暖かくなって♡♡
次に、

れろお♡♡♡

覆った口はそのままに、中で舌が下から上へと舐め上げる♡♡

「……ッ！♡♡♡」

布を割れ目へ押し付けるように♡♡

鈍い感触に私の背中では背もたれをずり下がった♡♡♡

れ♡♡ れろ♡♡♡ れろお♡♡

「う、わ♡ あ♡♡ あッ♡」

何度も布を押し込んでくる♡♡

れろ♡♡ れろお♡♡ れろおれろお♡♡ れろお…

♡♡♡

「ん、あ、あっ、だめ、それ♡♡」

優里ちゃんの唾液なのか、私の愛液なのか♡

下着が濡れていく♡♡♡ 濡れた布越しの舌の感触がたまらない♡♡

「ねえ、ちゃんと乳首も意識しててよお♡♡ そだ、もう片っぱの乳首も可愛がってあげよ♡♡♡」

「きゃ、ッ♡♡♡」

奈央ちゃんが唇を尖らせて、もう片方の乳首に爪を立てた♡♡♡

可愛く飾られた長い爪♡ その爪がまだなだらかなま

まの乳首を掘り起こすように♡♡

こすう……♡♡♡

頭を撫でる♡♡

「〜〜っ♡♡♡♡」

ビクンッ！♡♡

足が跳ねて、二人は一度唇を離すと、おもちゃを見つけた子どものように無邪気に笑った♡♡

「続けよっか、これ♡♡ 布越しクンニされながら乳首両方とも構ってもらお？♡♡♡」

「こっちの乳首もすぐ勃っちゃう♡♡ いっぱいこすこす♡して、えっちな発情乳首にしてあげるね♡♡♡」

れろお♡♡♡

優里ちゃんの尖らせた舌が下着に食い込み♡♡

れろっ♡♡ れろっ♡♡ れろっ♡♡ れろれろれろ

れろっ♡♡♡

布越しに愛液を舐め取る勢いで上下した♡♡

ちゅ、ぱ♡♡♡ ちゅ♡♡ちゅ♡♡ べろん♡♡♡

奈央ちゃんは育てた乳首を唇で包み、吸って、舐め倒して♡♡

こすこす♡♡ こすこすこす♡♡ しこっ♡しこっ♡

しこっ♡

血が流れ込んでいくもう片方の乳首を爪先でしごく♡



「ッあ♡♡ あ♡あ♡ だめ、気持ち良くなっちゃう♡
♡♡ く、ッ♡♡ん…！♡♡♡」

「そうだね♡お姉さんのマン汁の味分かるくらい、パン
ツどんどん濡れてくるし♡♡♡ もうこんな濡れちゃっ
て弱すぎなんだけど♡♡♡♡」

「乳首も乳輪まで張ってきちゃって可愛い♡ 発情アピ
ールしちゃってんじゃん♡♡♡ ちゃんと構ってあげる
から♡♡」

さらに背中がずり下がった♡♡♡

上を向く乳首は奈央ちゃんに、座面からずり落ちそう
な濡れたおまんこは優里ちゃんに差し出して、足を踏ん
張る♡♡

れるっ♡れるっ♡れるっ♡ ぬりゅ…ッ♡♡♡

「ッあは♡♡ あッ♡♡♡ そこ…っ、よわいい…♡♡
♡♡」

「ここだよね、クリがパンツ押し上げてるからすぐ分か
るよ♡♡ ……はあ♡♡♡興奮してきた♡♡ とまんない♡♡♡」

ぢゅっ♡♡れるっ♡♡ ぢゅっ♡♡れるっ♡♡ ぢゅ
っ♡♡れるっ♡♡

こすこすこすこす…ッ♡♡♡ しこしこしこしこしこ
…っ♡♡♡

「あ、あぁっ♡♡♡ちっ、乳首の先っぽ♡♡♡ 背中ビク
ビクするぅ♡♡♡ うぁッ♡♡♡あぁぁっ♡♡♡」

「乳首完勃起♡♡♡♡ シャぶりやすくて最高♡♡♡ ね
ーえ♡乳首フェラしてほしーんでしょ♡♡♡じゅぶじゅ
ぶ唾液絡めてしごいてほしーんでしょ♡♡♡ ほらほら
♡♡」

「あッ♡♡♡ あぁっ、ッ♡♡♡ も、やばい、かも♡♡♡
イっちゃう♡♡♡ 乳首とクリ一緒は、気持ちよすぎ、
……んっ♡♡」

腰が浮く♡♡♡♡

踏ん張った足の先から浮ついた感覚がクリトリスへ走
って、乳首で増幅して、頭の中を溶かしていく♡♡

「イっ、イっちゃう♡♡♡ イく♡♡♡ んぁッ♡♡♡あ……
っっ♡♡♡」

「ストップ♡♡♡♡」

昇り詰める寸前♡♡♡♡

二人とも私から唇を離してしまった♡♡

「……、っ、な、なんで」

「あはは♡♡ きもちーの続いちゃってんだ♡♡♡ 腰
揺らしちゃってえっちすぎ♡♡♡♡」

「気持ちいいのもっと欲しい？♡♡ イくまでしてほしい？♡♡♡ ほしいなら言ってほしいな～♡♡♡」

目を細めて私を見下ろす二人♡

歳上の私をおちょくるその顔に興奮すらしてしまう♡
♡♡

私もだいぶどうかしていた♡♡

「イきたい…♡♡ もうちょっとなの、もうちょっとさ
れたらイっちゃう♡♡♡ やめないで…」

「……♡♡♡♡♡」

優里ちゃんが私から視線を逸らさず、ごそごそとスカ
ートを捲り始めた♡♡

膝を立たせ、勃起したままのおちんぼを見せつけてく
る♡

「私も一緒に気持ちよくなりたい…♡♡♡♡♡」

優里ちゃんはおちんぼを脈打たせながら、私の下着を
引き抜いた♡♡

濡れた感触が離れひんやりと空気を感じたおまんこへ、
つつつの亀頭を触れさせる♡♡

「……っ♡♡♡」

熱い先っぽがくすぐるように動いた♡♡

乳首を奈央ちゃんにしゃぶられたままの私は、それだけでまた、たまらなくなってくる♡♡♡

くちゅ、ちゅ♡♡

「ッあ♡ あん…っ♡♡♡」

「お姉さんのクリちゃん、おちんちんみたいに勃起しちゃってるね♡♡♡」

片手でおちんぽの位置を調整し、包皮の上からクリトリスを押し込んでくる♡♡

くちゅ♡♡ ちゅく、ちゅく♡♡

「……ッ♡♡ ん、あ♡♡♡」

「硬いし♡剥けそうだし♡♡ ちっちゃいから私のおちんぽで簡単に潰れちゃうよ♡♡ ほら♡ほら♡」

言葉通り、弾力のある亀頭でクリトリスを潰して♡♡

ぐちゅんっ♡♡ ぐちゅ、ちゅ♡♡

「ッッあ♡♡ アッあ、っ♡♡♡」

「おまんこもぐっちょぐちょだあ♡♡♡ ちょっと撫でただけで私のチン先ぬるぬるになっちゃった♡♡ これ

でクリちゃん擦ってあげるね♡♡♡♡」

愛液を掬って、押し潰しながらまた上下に擦り上げる
♡♡♡

ぐちゅ♡♡ ぐちゅ♡♡ ぐちゅっ♡♡ ぐちゅっ♡
♡

「……は♡♡ あ、あ♡♡ クリ♡きもちいいよお♡♡
♡ もっと強くして…♡♡♡♡」

「えっちだな～♡♡♡♡ おまんこから掬いきれないく
らいマン汁溢れてくるよ♡♡ おちんちんで拭ってあげ
なきゃね……♡♡♡」

今度はおちんぽが、濡れた割れ目に少し押し込まれた
♡♡

押し広げられる感覚にお腹の奥がきゅうっ♡と締まる
♡♡♡♡

ぬりゅ♡♡ ぐちゅっ♡♡ ぐりゅんっ♡♡♡

「はあっ♡♡ は、ッ♡♡♡ あああ、っ♡♡」

「ぐちゅぐちゅのおまんこ♡♡もっかい…♡♡♡ はあ
…♡♡ ……おまんこにおちんちん入っちゃいそ♡♡♡
♡」

優里ちゃんの息が上がっていく♡♡

私ももう隠さなかった♡♡♡♡

呼吸が早くなり、いつの間にかおちんぽに合わせるよ
うに角度を調整していた♡♡♡♡

ぐちゅん、ぐちゅっ♡♡♡

ぬりゅ♡♡ ぬりゅ♡♡ ぬぢゅ、ちゅ♡♡♡

スカートの裾が引っ掛かった、いきり立ったおちんぽ
を♡♡♡♡

受け入れたくてしょうがない♡♡♡♡♡

「はっ♡♡ はっ♡ 優里ちゃん、あッ♡♡ はや、く
……っ♡♡♡♡♡」

「ふふ♡♡入っちゃう♡♡♡ あ〜〜〜入ってくよ♡♡
あったか……♡♡♡♡♡」

「ここからでも見えるよ〜♡♡ お姉さんのおまんこが
ちんぽ飲み込んでくの♡♡♡♡ どんどん埋まってく…
♡♡♡♡」

覆い被さって乳首をしゃぶっている奈央ちゃんの背中
に、私はしがみついた♡♡

途端、優里ちゃんは我慢できないというようにおちん
ぽを、

ぐちゅんっ！♡♡

押し込んでくる♡♡♡♡♡

「あああッ♡♡♡♡」

「お姉さんのおまんこきもち〜〜♡♡♡♡ あったかくてきゅんきゅんして♡吸い付いてくる♡♡♡♡」

「ねえ乳首までまた硬くなったんだけど♡♡ おまんこされたら他も気持ち良くなっちゃうんだあ♡♡♡かわいすぎ♡♡♡♡」

優里ちゃんは興奮したような熱い息を吐くと、私の腰を掴み♡♡

ゆっくりと中を往復し始めた♡♡♡♡♡

ぬちゅ、ぬちゅっ♡♡

「あ…っ♡♡ んあ、…あッ♡♡♡」

「おまんこ♡ ちんちん好き好き♡してくれてるよ♡♡」

ぬちゅっ♡♡ ぬちゅっ♡♡ ぬちゅっ♡♡

「ンああっ♡♡♡ んッ！♡♡っ！♡♡♡」

「おちんちん気持ちいいね〜？♡♡♡♡」

ぬちゅッ♡♡ ぬちゅッ♡♡ ぬちゅッ♡♡

「き、きもち…！♡♡♡ ああ、っ！♡♡はああッ♡♡♡」

「嬉しい…♡♡♡♡ おちんちんあげる♡♡いっぱい突くね♡♡♡♡♡ ね、手繋ご？♡♡♡」

ぬちゅ、ぬちゅっ♡♡

ぬちゅッ♡♡ ぬちゅッ♡♡ ぬちゅッ♡♡

優里ちゃんの指が私の指に絡まり、握り込まれた♡♡

少しずつ早くなる優里ちゃんの腰♡♡♡

私に覆い被さっていた奈央ちゃんは、「ぢゅ〜〜〜…
っ♡♡♡」と乳首を吸い伸ばしながら、手をクリトリス
まで移動させた♡♡

「全部一緒に気持ち良くなるっか♡♡ 気持ちいいとこ
いっぱいの方がいいもんね？♡♡♡」

乳首を吸いながら、

長い爪が♡♡

クリトリスの先端を覆う包皮を♡♡

こちゅこちゅこちゅこちゅこちゅ……っ♡♡♡♡♡

擦り立てる♡♡♡

「うああッッ！！♡♡♡」

「勃起乳首フェラして♡クリちんぽカリカリ♡♡♡ 体
ビクビクだね〜♡♡♡」

「おまんこぎゅーってしたあ♡♡♡♡ 狭くなっちゃっ
たここで♡おちんちん無理やり動かしてやる〜♡♡♡

♡」

ちゅこちゅこちゅこちゅこちゅこっ♡♡♡

クリトリスに鋭い刺激を与えてくる爪♡♡

ぢゅぽお♡♡♡ ぢゅぽっ♡♡ぢゅぽっ♡♡♡ ぢゅ
っぽお♡♡♡

フェラチオするように乳首の幹を往復する唇♡♡

ずちゅッ！♡♡ ずちゅッ！♡♡ ずちゅッ！♡♡

ずちゅッ！♡♡

おまんこを押し広げるような勢いのあるおちんぽ♡♡
♡♡

「ッあ♡♡ あっ！♡♡♡ あああッ！♡♡ す、すご
い、これ…！♡♡ ぜんぶされるのきもちいい！♡♡
♡♡♡ あああ、っ！♡♡♡」

「すごい顔♡♡ 本気で気持ちい～って顔してる♡♡
♡ 歳上のお姉さんが歳下にそんな顔させられてるって
思うと余計興奮しちゃうな～♡♡♡♡」

「このままイっちゃお♡♡ さっきイけなかったもんね
♡ 三点責めされて気持ちよ～くアクメキメちゃお♡♡
♡♡♡」

ちゅこちゅこちゅこっ♡♡♡ ちゅこちゅこちゅこ
っ♡♡♡

ぢゅぽッ♡♡ ぢゅぽッ♡♡ ぢゅぽッ♡♡ ぢゅっ
ぽ♡♡ぢゅっぽ♡♡

ずちゅッ！♡♡♡ ずちゅッ！♡♡♡ ずちゅッ！♡
♡♡ ずちゅッ！♡♡♡

二人は私を快感で追い立てながら笑っている♡♡
それでも私の細かな変化にはしっかりと注目している
ようだ♡♡♡

奈央ちゃんはクリも乳首も、私が強く反応する方法で
擦り立て♡♡

優里ちゃんもおちんぼの先が当たると余計におまんこ
を締めてしまうところを狙って、細かいテンポで小突い
てきた♡♡♡

ちゅこちゅこちゅこッ！♡♡ ちゅこちゅこちゅこッ
！♡♡

ぢゅッぽ！♡♡♡ ぢゅッぽ！♡♡♡ ぢゅッぽ！♡
♡♡ ぢゅッぽ！♡♡♡

ずちゅッずちゅッずちゅッずちゅッずちゅッずちゅッ
！！♡♡♡♡♡

「あッ、ンあッ、あああ！！♡♡♡ だめだめだめ、ど
んどん敏感、なって…！！♡♡♡♡♡ ………ッッ！♡
♡ ………— — — — —っっ！！♡♡♡♡♡」

「イきそ、でしょ♡♡♡ おまんこ奥、おちんちん吸ってくる♡♡♡♡♡ ……、私もきもちいい♡♡♡♡♡♡」

ずちゅずちゅずちゅずちゅずちゅずちゅずちゅずちゅツツツ
！！！！♡♡♡♡♡

優里ちゃんが前屈みになりめちゃくちゃに腰をぶつけてきた♡♡♡♡♡

長い髪がお腹に垂れて、くすぐったい♡♡♡

ずちゅずちゅずちゅずちゅずちゅずちゅずちゅずちゅツツツ
！！！！♡♡♡♡♡

ずちゅずちゅずちゅずちゅずちゅずちゅずちゅずちゅツツツ
！！！！♡♡♡♡♡

「あ♡♡♡あ♡♡♡あ♡♡ イくッ！♡♡♡ このまま、っ♡♡ はッッ、あっ♡♡♡♡」

「うん♡♡イこお♡♡♡♡ 私も出すよ♡♡ お姉さんのおまんこに射精する♡♡♡♡♡♡ あああ♡♡精子上ってきたあ♡♡♡♡♡」

腰が上向き、細かく痙攣した♡♡♡♡♡

頭の中が真っ白になって♡♡♡

ずちゅずちゅずちゅずちゅずちゅずちゅずちゅつつつ
!!!♡♡♡♡♡

ずちゅずちゅずちゅずちゅずちゅずちゅずちゅずちゅつつつ
!!!♡♡♡♡♡

「イ、く……!!!♡♡♡♡♡ ンッあああああっ!!
!♡♡♡♡♡♡♡」
「うあ……つつ♡♡♡♡♡」

いった♡♡♡♡♡

制御できない腰が何度も跳ね上がる♡♡♡♡

優里ちゃんも腰を震わせていた♡♡♡

「ねえ、私もする! 優里ばかりずるいよ」

落ち着かない体を奈央ちゃんにひっくり返された♡♡
立たされソファにしがみつくと、お尻と腰にふわふわ
のスカートが乗る♡♡♡

その下、優里ちゃんにピストンされ続けぐずぐずに濡
れたおまんこに♡♡

ずぷう……♡♡♡♡♡

すぐにおちんぽが入ってきた♡♡

呻きながら後ろを振り返るとスカートで隠れて何も見えない♡ でも確かにその下で、奈央ちゃんの腰がすでにお尻に密着している♡♡♡♡♡

……たぱんっ♡♡

引いて、ぶつけて♡♡

奈央ちゃんは腰を動かし始めた♡♡♡

たぱんっ♡♡ たぱんっ♡♡

「んあっ、あ♡♡♡」

「イってすぐだからおまんこふわついてるな～♡♡♡」

濡れた音と肌と肌のぶつかる音がスカートの中で鳴っている♡♡♡♡♡

たぱんっ♡♡ たぱんっ♡♡ たぱんっ♡♡

「…ッ♡♡ イったばっか、なのに…！♡♡♡」

「だって私のおちんぽも受け入れてくれないと平等じゃないでしょー？♡♡ ほら、おまんこ締めて♡♡♡♡ 私のおちんぽももぐもぐして♡♡♡♡」

腰を掴む奈央ちゃんの指が食い込む♡♡

しっかりと私の腰を固定し、奈央ちゃんは腰をぶつけ

続けた♡♡

たぱんッ♡♡♡ たぱんッ♡♡♡ たぱんッ♡♡♡
たぱんッ♡♡♡

「……～～～ッ♡♡ あああッ♡♡♡ だ、め♡♡ ま
だ…！♡♡♡」

「もう、しょうがないなあ♡♡♡ じゃあお姉さんの雑
魚クリちんぽも可愛がってあげるから♡♡♡♡♡」

奈央ちゃんは私のお腹の下に手を回し♡♡

下向くクリトリスを二本の指でぎゅっ♡と挟んだ♡♡
♡

「——ッッ、お♡♡♡♡」

「え、やばあ♡♡ そんな声出しちゃうんだあ♡♡♡♡
もっとしてあげるね♡♡ クリちんぽ♡♡ぎゅ～～～
♡♡♡♡ ぎゅ～～～～っ♡♡♡♡♡」

「ん、…ッ♡♡ お、お、っ、…………ッほ♡♡♡♡♡」

■続きは製品版にて♡